

《エッセイ：「素顔のモナコ」》

Essai : “La vie quotidienne à Monaco”

木下 恵美子

KINOSHITA Emiko

Abstract: Etant donné que mon compagnon était Monégasque, j'ai eu le plaisir de vivre à Monaco une large période de ma vie. Pendant ce temps-là, j'ai reçu des amis, des connaissances, ma famille et même les gens qui je ne connais pas... Toutes ces personnes avaient toujours rêvé de Monaco. Je fus leur guide de nombreuses fois dans de nombreux domaines, incluant les magasins de grandes marques françaises. Cela était mon rôle obligé pour les japonais. Ils prenaient des photos devant le Casino, marchaient le long du parcours du Grand prix de formule 1. Ils étaient très satisfaits d'être à Monaco même s'ils n'y séjournaient que quelques heures. Evidemment qu'on ne peut pas tout connaître avec leurs court séjours dans ce pays. C'est pour cette raison que j'aimerais présenter le vrai visage de Monaco, comme quand je vivais dans le monde Monégasque, chargé d'histoire et cultivant la joie de vivre dans cette superbe région du globe.

Keywords: Monaco, le Casino, le marché, les petits États, モナコ、カジノ、朝市、小国
家

私がモナコに長く暮らしていた間、日本から多くの友達、知り合い、それまで全く会ったこともない誰かの紹介人物、そして家族など、様々な人達がこの国にある種の憧れを抱いてやって来た。

そんな時は決まって、観光ガイドブックにある名所案内と、有名ブランド品買い物の付き合いが私に課された役目であった。大半の人達はそれで充分満足をして、カジノの前で何枚もの写真を撮ったり、F1 グランプリのコースを自分の足で確かめるなど憧れの気持ちを満たしていた。人によってはたった 2,3 時間という短いモナコ滞在にもかかわらず、この小さな国の全てを知り尽くした様な言葉が耳に入ってくることもあった。

住民の一人であった私にしてみれば実に心外なことで、本当のモナコの素顔をもっと分

かってほしいという願いをいつも持っていた。大富豪のための税金逃れの逃避国というイメージを拭い去れない部分はあるが、昔からのモナコ人の多くは、Palais (王宮)のあるモナコヴィル地区に住んでいる。ここには、まだ、石造りの古いアパートマンが残っていて、そこで自分たちの家族代々の伝統を守りながら、ごく普通の生活を送っているである。私のモナコ暮らしはまさに、ここから始まった。これから機会があつて訪れる人達のために、モナコの素顔の一端を紹介してみたい。

La condamne et les marchés (ラ・コンダミンヌと朝市)

モナコは国全体が四つの地区から成り立っている。その中の一つ、古い一角が残っているのがラ・コンダミンヌである。

何といっても魅力的なのは、地元の人々の暮らしを潤す朝市であり、住民の少ないモナコでも毎朝何ヵ所かに市が立つ。F1 グランプリの出発点になっている港からの道につながるラ・コンダミンヌ地区は、下町の雰囲気をかもし出す商店街である。その中心が朝市の開かれる Place d'Arme (アルム広場) で、噴水の周辺に果物、野菜、花などの市が並ぶ。朝早く 6 時ごろから、Menton(マントン)や Eze(エズ)などの農家からの直売もある。特に季節の作物は新鮮で値段も安いので、いつも大きな袋を提げた買い物客が集まって来る。広場の片側にはカフェやレストラン、キヨスク、肉屋、魚屋、薬屋が並びちょっとしたアーケード街となっている。パン、ハム、ソーセージ、チーズ、日用雑貨、イタリアの食材などあらゆる物が手に入る店が、建物の中に定着している。

私はここで、コーヒーとクロワッサンの朝食をとりながら、行き交う人々の様子を眺めたり、朝の光のもとで新聞に目を通したりする日もよくあった。顔なじみになったカフェのギャルソンは愛嬌のあるポルトガル人で、注文の品をお客さんに運んでは、パトロンの目を気にしながら世間話に余念がない。彼は最近、どうもカジノに足を運んでいるようで、遊び方のコツを知り合いのお客さんに真剣に聞いている。しかし、今のところはスロットマシンに凝っているだけで、本格的な賭けの醍醐味を味わうまでにはまだまだ時間がかかりそうだ。その夢を実現するには十分な資金の貯えも必要なので、カフェで得る収入だけではまだ、ほど遠いようだ。でも、彼は仕事柄、気配りや注意力が備わっているので、本気でカジノ通いをすれば一生遊んで暮らせるほどの大金が入ってくるかも知れない。「運が良ければ人生何でもやりこなせるさ。」と彼は楽天的だ。

この朝市で私がいつも買い求めていたのはお好みのピーサラディエ。簡単に言えばピ

ザの様な物だが、ニースとモナコではパイにのせる具が少し違い、こちらはトマトソースの味がこってりしたイタリア風である。この店ではソッカやバルバジョワン（モナコ餃子と私が名付けた）などこの辺りの昔からの食べ物に、人々が行列をして焼き上がるのを待っている。夫婦でやっているこの店がいつも混み合っていて、時間をはずして行くと、もう、その日の分は売り切れとなってしまうほどだ。やはり昔懐かしい味には時を問わず、人々の気持ちが惹かれるのだろう。何でも古い物を大切にする習慣をこんな場面でも垣間見る感じがする。

ヨーロッパ各国では朝市が今だに人々の日常生活に密着していて、地にしっかり根を張っている。それこそ、じゃがいも 1 個やニンジン 1 本でも気兼ねなく買えるので、一人暮らしの老人などにとっても便利で良い。

モナコを後にマントンを通り過ぎるとイタリアとの国境にぶつかる。そこの海岸沿いの空き地にライトバンが数台無造作に停められ、地元の農家が野菜や果物を直売している朝市がある。値段も安く何ととっても新鮮なので、私もよく出かけて行った。商売っ気たっぷりのイタリア人、大きなかけ声で「Buon giorno signora」（ボンジョルノ シニョーラ）、「今日のトマトは採れたてで、若い女の子のようにピチピチしてる。」などと、次々にジョークを飛ばしながら客集めをする。それにつられ我々も買い出しに精が出る。ズッキーニ、とげのあるアルティショは他にはないみずみずしさが魅力だ。それにシシリア島から来たオレンジはビタミンたっぷりで朝の食卓にはうってつけ。あれもこれもとつい買い過ぎるのだが、彼らの「Grazie」（グラーチェ）の言葉と笑顔につられて財布のひももゆるんでしまう。

私はしばらくの間、この市^{いち}にとりつかれてイタリア通いを繰り返していた。ところが、ある日いつものように買い物リストをかかえてここまで来てみると、ライトバンの車是一台も見当たらない。もしかしたら、今日は休みなのかとちょっとがっかりしたが、翌日、その又次の日も通い続けた。しかし、空き地は空き地のままになっていて人の姿は全く見えない。結局、私の推測では、この場所が商売用地として認可されていなかったため、彼らは役所から締め出しをくって追い出されてしまったのだと思う。あんなに人だかりがして繁盛していたのに、あの農家の人達は一体どこへ行ってしまったのかひどく残念だ。毎日の重労働を苦ともせず仕事に専念する彼らの、せめてもの喜びの場が奪われてしまった。何ということだろう。空地になってしまった朝市、この日はイタリア国境の寒々しい冬の

海がますます淋しく目に映った。

La Place des Moulins （ムーラン広場）

ムーラン広場の由来はモナコの人々が農業に従事して暮らしていた 1900 年代の初め頃、このあたりに石の挽砕機でオリーブオイルを絞る作業が行われたムーラン・ア・ウイル（オリーブオイル搾油所）があったことからきている。その記念碑とでも言うか、当時、オリーブを潰すのに使われていた直径 1m 以上もある円筒の重い石がこの広場に残されている。今は季節の花が絶えない、海が眺められる美しい公園になっていて、私も夕方の涼を求めてよくここに足を運んでいた。そんな時は決まって、既に 80 才を越えた近所のご夫妻に出会い、海風の心地良さを感じながら、お互いの近況や友達の噂話をするのがいつもの事であった。

この広場の辺りは、モナコにしては珍しく一年中休みなしで開いているブロンジュリー（パン屋さん）、庭園の広場のカフェなどで人の往来がはげしい場所である。夏にはよく、野外コンサートがあり、どこからともなく人々が集まって来て、ラテン音楽などの軽快なリズムで夜遅くまでにぎわっていた。

広場を過ぎると、「イタリア通り」と道の名前が変わる。その名の如くイタリアへ向かう主要道路。ここから 1km ほど先はフランスに入るが、国境という感覚は全くない。ただ町の様子が違ってきて、モナコを抜けたなとすぐに分かる。

1950 年代、この通りに Marcel Pagnol（マルセル・パニョル）が住んでいた。フランス、プロヴァンス地方出身の劇作家、映画監督であった彼は「ファニ」や「マノンの泉」「マリウス」「セザール」など馴染みの深い作品を残している。既に 1926 年、若くして「ジャズ」と言う劇をオペラ座で公演、当時、モナコの住まいを足場にしてパリなどで活躍をし、モナコ大公とも親しくかかわっていて、ここでの優遇された文化活動を展開していた。後に移り住んだパニョルの邸宅「La Lestra」（ラ・レストラ）も現存している。私は彼の映画をよく DVD で見ていた。特に少年時代の思い出と題したプロヴァンスが舞台になった物語、マルセイユの下町の生活などを描いたものが好きで、Fernandel（フェルナンデル）が主演したパニョルの多くの作品には独特の味わいがあるので、すっかり憑りつかれてしまった。大きな目と太い口びるが印象に残るこの役者は、まさに役者としての才能を持って生まれてきたと言える。

プロヴァンス育ちのマルセル・パニョルでさえ、モナコでの生活を夢に見ていたのだから、この国が持つ魅力の原点を、当時に遡って私なりにきちんと分析してみたいという意欲にかられている。

La fierté des petits États (小国家の誇り)

私が住んでいたアパルトマンのすぐ隣りにあるエレベーターに乗って、海岸通りに下りて行くと、モナコで唯一の海水浴場がある Larvotte (ラルボット) 地区に至る。

早朝、さわやかな海風に誘われ眠気も覚め、水平線から顔を出す真っ赤な太陽が大きく、まぶしいかぎりには迫って来る。朝の澄んだ大気に包まれた静かなひと時が好きで、海岸を散歩するのが日課の一つになっていた。よく顔を合わせるジョギングの若者に「Bonjour」(ボンジュール) とあいさつをしたり、犬と散歩をする白髪の紳士と目が合ったりと一日のスタートが何とも心地良い。道路を掃除する人達の話し声も何かはずんでいる感じがする。

日本ではあまり知られていないようだが、リヒテンシュタイン、アンドレ、ルクセンブルグ、アイスランド、マルタ、サン・マルタン、シーブルなどヨーロッパの人口百万人以下の小さな国が集まったオリンピック、スポーツの祭典が 2 年に一度行われている。

初夏を告げる暑い 6 月の初め、このあたりの砂浜が小国家連盟オリンピック、ビーチバレーの試合会場となった。観客はあまり居ないので、小中学生なども借り出されて声援を送っている様子は、何ともほほえましい。

1985 年サン・マルタンが初めての開催国となった。モナコでは既に 1987 年に行われたので、この年、2007 年が 2 度目であった。開会式を始めとして陸上競技や水泳、柔道、バスケット、バレーボール、テニス、ヨットなど、国の名誉をかけて競う選手達の姿があちこちで見られた。国が変われば皮膚の色、顔つきなどが違うが、この時ばかりは各小国家の国民の代表として、それなりの誇りと自信に充ち溢れた熱気がいっぱいであった。4 年に一度の世界的なオリンピックとは比較にならない程規模は小さいものだが、小国家の友情の絆が、このような機会を通して強く結ばれていくのはすばらしい。

モナコの人口は 3 万人を少し上回っているが、モナコ人の国籍を持つ人達はその中の 1 割強である。それでもこの国には強力な選手達がいる、最終的には金メダル獲得数は 1 位と好成績をあげた。メダルの輝きは選手やチームの努力と汗の結晶ではあるけれど、それ

ぞれが大会に臨むまでの過程に計り知れない時間とお金がかかる。ある意味では、それにどれだけ出費出来るかが国の勝敗につながっているのではないだろうか。モナコの場合はそれに見合うだけの条件が充分整っている訳だ。

こんなに多くの小国家からの来客に、普段の観光客とは違う親近感が持てると話している人達も居るほどで、このオリンピックにはそれなりの意義があるのだろう。私も好奇心旺盛にあちこち試合会場を見て回った。応援する人達は数えるほどしか居ないが、とてもエネルギーで選手達にもその気持ちが届いているようだ。

結果的にモナコはどの競技にもトップの力を発揮した。まだ歴史の浅いオリンピックだが、2年ごとに小国家同志の友好関係を深める意味で、今後の継続維持が大いに望まれている。

Noël（ノエル・クリスマス）

12月。クリスマスを控えて店のショーウインドウは赤や緑、真っ白な雪の色を主体に趣向を凝らした飾り付けで、道行く人達の目を捉える。サンタクロースやとなかい、雪だるまなどが街の隅々まで置かれ、クリスマスムードに溢れ、プレゼントお目当ての子供達の気持ちも何かと落ち着かなくなる。港の通りには **Marché de Noël** のクリスマス市が立ち、毎日通い続けても新しい発見がある楽しいグッズが並ぶ。モナコの中心、カジノ広場のクリスマスツリー、イルミネーションの創造的で華麗な美しさには、大人も同様胸がときめく。毎年オリジナルなテーマを持った装飾、光の大噴水、巨大なツリーにきらめく幻想的な照明、ブルーに染まった威厳あるカジノの建物がゴールドの電飾で輝きを深める。12月初めの週末の夜、カジノや周りのカフェ、ホテルの明かりが一斉に消され、星空のもとで、**Princesse Stephanie** (ステファニー王女) によるクリスマス装飾の点灯式が行われる。ホテル・ド・パリのテラスに陣取った楽団の演奏とともに、広場のイルミネーションが一斉に灯り、観衆の大きな喜びの声「**Joyeux Noël**」(ジョワイユ・ノエル) でクリスマスを迎える雰囲気がますます盛り上がる。

この時期は私も子供のように心がはずみ、ストーリーのない夢の中に自分を置いて、宇宙へ舞い込んだ気分になって、すっかり光の宴に魅了されてしまう。冷たい夜風も一向に気にならず、イルミネーションに取り囲まれて、モナコの幻想の世界で今、自分がここに居る不思議を感じていた。

マントンに住む私の友人 **Robert** (ロベルト) は自然尊重を基盤にした造園アーティストである。毎年、この時期にホテル・ド・パリでクリスマスツリーのオークションが行われる。おおかたはモナコにある有名ブランドの店、ホテルなどが豪華絢爛と言わんばかりの装飾でツリーを作り上げる。まるで宝石をちりばめた様なきらめきで富裕層には打ってつけの飾りである。ロベルトも個人としてこの機会に出品する許可を得て、彼なりの思いと感覚でオークションに参加した。初めてのことなので、夏を過ぎたころから製作準備に取りかかった。海岸に出かけては流木などを拾い集め、それに色付けをして、「**Le crèche**」(キリスト生誕を再現した飾り付け)などを配置し、そこにアーティストの感覚を加えた自然で素朴なツリーを仕上げた。何と、オークションでこれが **Prince Albert** (アルベール大公)の目にとまり、結構な金額でおとされた。その結果、王宮のクリスマスにはロベルトの自然保護への願いが届けられることになったのだ。アルベール大公の地球環境問題への取り組みとつながるものがあつてのことだった。このオークションの売上金は主にモナコ赤十字に寄付され、世界の生活困窮者への支援に当てられている。

いよいよ **Noël** (ノエル)。普段はなかなか一同に会せない家族全員が集まる。特に **Réveillon** (イヴの日)の食卓は格別である。カトリック教が根強いこの国では、伝統に従った様々な行事が慣例となっていて、多くの家庭ではそれを尊重している。私たちの家でもこの日ばかりはフォワグラ、オマールエビ、スモークサーモン、生牡蠣を始め、贅沢な味が勢ぞろいする。シャボンにトリュフを詰めた料理がメインで、特にクリスマスのために太らせたこの若鶏は1か月以上前から行きつけの肉屋に注文しておく。食べることに執念深いこの家族の面々は、手作りのフォワグラを **70km** も離れた私たちのヴィラのある村の肉屋から届けてもらうほどなのだ。それにこの夜は特別で、シャンペーンは勿論、とおきの年代物のワインがグラスに注がれる。

クリスマスの音楽とともにツリーの下に置かれたプレゼントを交換し合い、メインのシャボンを食べ始める。と、それまでおしゃべりで賑やかだったテーブルが静まり返り、ナイフとフォークが休みなく動く音だけが聞こえている。おいしいものには何の言葉もない。家族や親せきの者がこうして一緒に過ごせる機会があまりないので、何か月も前から年に一度のこの日の準備がなされる。デザートはプロヴァンスの習慣に従って、アーモンド、いちじく、ぶどう、オレンジなどの「**Les treize desserts**」(13種類の乾燥フルーツのデザート)が並ぶ。この数はキリストの最後の晩餐に列席した弟子の人数がいわれと

なっている。実際はノエル・ド・ブッシュがシャンペーンとともにお祝いの食事の最後を飾る。クリスマスディナーのゆっくりとした時間が流れていく。その後、人々は「*La messe de minuit*」（深夜のミサ）へと向かう。キリストの生誕を祝う教会の鐘が街中に鳴り響き、おごそかな讃美歌のメロディと共に祈りを捧げる。

その何日か後には年末を迎え、友達同士が集まって、一年の終わりのひとときを音楽とダンスに興じる。零時の合図と共に花火があがり、シャンペーンを片手に新年を祝う「*Bonne année !*」（新年おめでとう！）の喜びの声が溢れ、心新たな日々の暮らしが始まる。

(Received: August 2014)